『賦光源氏物語詩』を読む（四）

――須磨・明石・澪標――

本間洋一

巻名は初句に詠み込まれている。この巻は、光源氏が都を去り須磨へ退居するに際し、人々を訪れて別離の挨拶を交わす場面から始まる。その人々とは亡妻（葵上）の父左大臣・紫の上・花散里・入道宮（藤壺）であり、更に故桐壺院の山陵参詣を経て、須磨への出発ということになる（猶、消息は朧月夜や春宮にも届けられている）。聯毎に分けて訳を付すと次のようになるだろうか。

須磨の浦に旅立つということで京洛（みやこ）を辞去なさいます夜明け前、別れ道で鳥の声が聞こえ来て共に涙を流したことでございました。

（それに先立ち光源氏様は）泣くなく故桐壺院の山陵（みはか）に参詣なさいましたが、その道筋には草が生い茂り、森の木立

十二　陬磨

赴陬磨浦辞京暁　陬磨の浦に赴かんと　京を辞する暁
別路聞鷄涙共流　別れの路にて鷄を聞き　涙共に流る
泣詣山陵春草茂　泣くなく山陵に詣（いた）れば　春草茂く
行尋江館暮松幽　行くゆく江館を尋ぬれば　暮松幽なり
御香猶在月前賜　御香猶し在り　月前の　賜（たまもの）
餘興未忘花下遊　餘香未だ忘れず　花下の遊び
胡国昭君霜後夢　胡国の昭君　霜の後の夢
雖其憂不若吾憂　其の憂へと雖も　吾が憂へには若（し）かざらん

〈七律。流・幽・遊・憂（下平声尤韻）〉

ちもこんもりと胸をしめつけられる程でしたし、旅の道中の大江殿といったあたりでは、夕暮れの松がほのかに見やられたのでした。

（光源氏様は須磨で一入物思いにくれる秋をお過ごしになっておられ）八月十五夜の月の下、かつて朱雀帝から拝領されました御衣を手元に置かれて、「恩賜の御衣は今此に在り」と口ずさまれたのでございました。そして（須磨に在り年が変って春を迎えました頃）都での桜の花盛りの折の遊宴の思い出が胸にこみ上げて来て、忘れられずにおられたのでした。

あの胡人の国へ嫁いだ王昭君も、胡人の角笛の音に霜夜の夢を破られ、腸を断ち切られるような切ない思いにかられたと申しますが、その辛いお気持ちにひきくらべても、（光源氏様は）わが憂いには及ばぬものと思われたことでございましょう。

光源氏が「かの須磨は、昔こそ人の住み処などもありけれ、今はいと里ばなれ心すごくて、海人の家だにまれ」（②161頁4～5行）な地へと退居を決心し、「三月二十日あまりのほどになむ都離れたまひける。人に、いまとしても知らせたまはず、ただいと近う仕うまつり馴れたるかぎり七八人ばかり御供にて、いとかすかに出で立ちたまふ」（②163頁8～11行）たのが第一句の背景である。「辞京」は「伊昔値二世乱一、秣レ馬辞二帝京一」（江淹「雑体詩三十首〈王侍中〉」『文選』巻三一）「我従三去年辞二帝京一、謫居病臥潯陽城」（「琵琶行[引]」『白氏文集』巻一二）「別時節候春云暮、為レ謁二慈親一辞二帝京一」（嵯峨帝「左兵衛佐藤是雄見レ授レ爵之二備州一謁レ親因以賜レ詩」『文華秀麗集』巻上）の類。「暁」とあるのは出立前の光源氏が「月出でにけりな。なほすこし出でて見だに送りたまへかし」（②185頁6～7行）と紫の上に語りかけ、月光に映えた美しい姿を目にしつつ「明けはてなばはしたなかるべきにより、急ぎ出でたまひぬ」（②186頁7～8行）とあるのに対応していると言えよう。第二句の「別路」は別れの途次、または旅路という程の意で、「別路千餘里、深恩重二百年一」（王勃「秋日別二王長史一」）「離堂思二琴瑟一、別路繞二山川一」（陳子昂「春夜別二友人一」）などと見えている。この語に続く「聞鶏」は先の紫の上との別れの場面や須磨への途次には実は出て来ない。とすれば少し遡った花散里邸での次のシーンをこそ想起すべきなのかも知れない。

西面は、かうしも渡りたまはずやとうち屈して思しけるに、あはれ添へたる月影のなまめかしうしめやかなるに、うちふるまひたまへるにほひ似るものなくて、いと忍びやかに入りたまへば、すこしゐざり出でて、やがて月を見ておはす。またここに御物語のほどに、明け方近うなりにけり。「短夜の夜のほどや。かばかりの対面もまたはえしもやと思ふこそ。事なしにて過ぐしつる年ごろも悔しう、来し方行く先の例になるべき身にて、何となく心のどまる世なくこそありけれ」と、過ぎにし方のことどものたまひて、鶏もしばし鳴けば、世につつみて急ぎ出でたまふ。例の、月の入りはつるほど、よそへられて、あはれなり。女君の濃き御衣に映りて、げに濡るる顔なれば……。

（②174頁14行～175頁9行）

二人は歌を詠み交わし、「思へばはかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ心をくらすものなれ」と仰って、光源氏は「明けぐれのほどに出でたまひぬ」（②176頁1～2行）とある部分である。詩句に「涙共流」と詠まれている事とも一致すると思われる。

頷聯の第三句には「山陵」とあるので、出立を控えた日の夕暮れに「院の御墓拝みたてまつりたまふとて、北山へ参でたまふ」（②178頁11～12行）場面ということになる。それに先立って入道の宮を訪れて挨拶した上、月の出を待って出かけると、「御墓は道の草しげくなりて、分け入りたまふほどいとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立木深く心すごし。帰り出でん方もなき心地して拝みたまふに、ありし面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり」（②182頁1～5行）あたりが「春草茂」「泣詣」の表現に反映しているであろう。猶、「春草」は「風吹二曠野一紙銭飛、古墓累々春草緑」（「寒食野望吟」『白氏文集』巻一二）「真娘墓頭春草碧、心奴鬢上秋霜白」（「寄二李蘇州一兼示二楊瓊一」同上巻一九）「春草年々緑、王孫旧此游」（劉長卿「漂母墓」）「石麟埋没蔵二春草一、銅雀凄涼起二暮雲一」（温庭筠「陳琳墓」）などと墓との関わりで詠まれる例も少なくない。今はもう亡き人の傍に春になればいつもと変わらぬ草が生え延びる。自然の生命力の強さと対比させることで人事のはかなさがより強調されるという表現の手法を漢詩文がしばしば用いることはよく知られていよう。猶、「山陵」は「武皇既崩、山陵未レ乾（中略）二帝失レ尊、山陵無レ所」（干宝「晋紀総論」『文選』巻四九）とあり、李善注に「漢崔禹曰、将軍墳墓未レ乾」と見える。また、「山陵　日本紀私記云、山陵〈美

佐々岐〉」（『和名抄』巻一四）とも見えるが、これを考証した狩谷棭斎は「山陵見二神代紀下一。（中略）水経渭水注、引二風俗通一云。陵者天生自然者也。今王公墳隴称レ陵。王念孫曰、陵之言隆也。按、秦名二天子冢一曰二長山一、漢曰レ陵。故通曰二山陵一。出二三秦記一。見二文選西征賦注一、水経渭水注亦云、長陵亦曰二長山一也。秦名二天子冢一曰レ山、漢曰レ陵、故通曰二山陵一矣。又唐律釈文、皇帝之墳称二山陵一。如二高祖之長陵一是已。然呂不韋説二秦昭王太子一曰、王之春秋高、一日山陵崩、太子用レ事。注曰、山陵喩二尊高一也。崩、死也。然則以二葬地一為二山陵一久矣。出二戦国策一。綏靖即位前紀、天武元年紀、又新撰字鏡、陵字同訓」（『箋注』）と詳述している。ここは言うまでもなく桐壺帝の墓陵の意である。第四句の「江館」は本来川のほとりの館で、「惆悵又聞題処所、雨淋江館破墻頭」（「微之到二通州一日授レ館未レ安（下略）」『白氏文集』巻一五）「江館月明秋思苦、野村礎怨夜夢虚」（中原広俊「秋日江州館下即事」『本朝無題詩』巻七・471）などの例あるが、ここは恐らく松の幽静なたたずまいを考慮しても、須磨への途次「かりそめの道にても、かかる旅をならひたまはぬ心地に、心細さもをかしさもめづらかなり。大江殿と言ひける所は、いたう荒れて松ばかりぞしるしなる」（②186頁11～14行）とある一節を指すと考えるべきであろう。かつての斎宮交替の折に用いられた旅宿（源融の別院との説もある）も、人が継続して手を入れなければ荒廃して見えるのに二、三年もかからないのが日本の自然環境の現実であろうか。詠まれている松には、残された孤独な心象が揺曳しているとみてよかろう。

須磨の「行平の中納言の藻塩たれつつわびける家居近きわたり」（②187頁10～11行）に居を定めた光源氏は、心細い暮らしのうちに都への思いを募らせ、使者をたてては手紙（ふみ）のやりとりを重ねる。そして、「須磨には、いとど心づくしの秋風に」（②198頁13行）に始まる有名な秋の憂愁にくれる場面へと続く次の章段が頸聯に関わる部分であろう。

今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所どころながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心」と誦じたまへる、例の涙もとどめられず。入道の宮の「霧やへだつる」とのたまはせしほど言はむ方なく恋しく、をりをりのこと思ひ出でたまふに、よよと泣かれたまふ。「夜更けはべりぬ」と聞こゆれどなほ入りたまはず。

見るほどぞしばしなぐさむめぐりあはん月の都は遥かなれども

その夜、上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも恋しく思ひ出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身はなたず、かたはらに置きたまへり。

（②202頁10行～203頁8行）

第五句はこの本文の諸注に指摘されているように、菅原道真が「去年今夜侍二清涼一、秋思詩篇独断腸、恩賜御衣今在レ此、捧持毎日拝二餘香一、」（「九月十日」『菅家後集』）と詠んだことも勿論ふまえられている（抑、光源氏の須磨退去が菅公の左遷をオーバーラップさせられる構想になっているのは周知の通り）。「月前」「花下」の対は春秋の佳節の景の代表としてよく用いられ、「昼聴二笙歌一夜酔眠、若非二月下一即花前、公子王孫競相挑、月前花下通二慇勤一」（紀長谷雄「貧女吟」『本朝文粋』巻一・18）などと詠まれる。「餘興」はあふれる興趣。「客散有二餘興一、酔臥独吟哦」（「詠興五首」其五「小庭亦有レ月」『白氏文集』巻六二）「吟レ詩酌レ酒好遊処、餘興未レ殫自忘レ還」（藤原明衡「春日桂別業眺望」『本朝無題詩』巻六・408）などとあり、「花下」との関わりから「花下忘レ帰因二美景一、樽前勧レ酔是春風」（「酬二哥舒大見一レ贈」『白氏文集』巻一三『千載佳句』巻下・春宴695『和漢朗詠集』巻上・春興18）などとある春花の下に遊ぶ詩も喚起させられようか。第六句は須磨で年が明け春を迎えた次の場面を意識したものであろう。

須磨には、年かへりて日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて、空のけしきうららかなるに、よろづのこと思し出でられて、うち泣きたまふをり多かり。二月二十日あまり、去にし年、京を別れし時、心苦しかりし人々の御ありさまなどいと恋しく、南殿の桜は盛りになりぬらん、一年の花の宴に、院の御気色、内裏の上のいときよらになまめいて、わが作れる句を誦じたまひしも、思ひ出できこえたまふ。

いつとなく大宮人の恋しきに桜かざしし今日も来にけり

（②212頁6～15行）

光源氏の心に浮かぶのは恋しい都の桜であり、花下の宴遊、即ち花宴の回顧であった。

尾聯の「胡国昭君」は勿論北方の匈奴に嫁がされた王昭君の故事を詠むもの。この場面は先の頸聯のシーンを少し溯った

「冬になりて雪降り荒れたるころ、空のけしきもことにすごくながめたまひて」（②208頁5～6行）に続くあたりである。

心にとどめてあはれなる手など弾きたまへるに、こと物の声どもはやめて、涙を拭ひあへり。昔胡の国に遣はしけむ女を思しやりて、ましていかなりけん、この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむことなど思ふも、あらむことのやうにゆゆしうて、（源氏）「霜の後の夢」と誦じたまふ。月いと明うさし入りて、はかなき旅の御座所は奥まで隈なし。床の上に夜深き空も見ゆ。入り方の月影すごく見ゆるに、（源氏）「ただ是れ西に行くなり」と独りごちたまひて……。（②208頁7～15行）

「霜後夢」は諸注に記されるように、名高い大江朝綱の「王昭君」（『和漢朗詠集』巻下・王昭君699～702所収七律一首）の頸聯に「胡角一声霜後夢、漢宮万里月前腸」とあるのを引用したもの。物語本文では「月いと明うさし入りて」と続いているが、これも先の句に「月前腸」と見えていたのに対応するのは勿論のことだが、更に道真の左遷をにおわせた「代レ月答」（『菅家後集』）の詩句詠へと連鎖させて展開する物語本文の叙述の緻密周到さは、漢詩の方にはない表現のアヤの深さが織り込まれているものと言えよう。猶末尾の句で光源氏の憂愁を王昭君よりも深いとみたのは、彼の憂いを殊更に強調したい漢詩作者の思いから出たものに他ならず、客観的に考えればいかがなものだろうか。光源氏の思いは、先の引用本文に見えているが、故国を離れ蛮夷に赴かねばならぬ王昭君の悲傷の情に心を寄せるというより、その詩句を吟じながらも王昭君を手放さなければならなかった皇帝の無念さの方にこそあるように思えてならないのは稿者の僻目か。そこがまた色好みの光源氏らしいところという気もしないではないのだが。

十三　明石

前吏染衣留此地　前吏衣を染めて　此の地に留まれり
深窓有女我潸憐　深窓に女有り　我潸かに憐む
琴箏数曲和波軫　琴箏数曲　波に和する軫
雲水千程伝浦船　雲水千程　浦伝ふ船
旅泊猶随華洛月　旅泊　猶し華洛の月に随ひ
閑亭纔望藻塩煙　閑亭　纔かに藻塩の煙を望む
任他遷客漂淪恨　任他　遷客の漂淪の恨み
枯木逢春心快然　枯木も春に逢うて　心快然たり

〈七律。憐・船・煙・然（下平声先韻）〉

詩中に「明石」の巻名は詠込まれていないが、巻の異称としての「浦伝ひ」は第四句に見える。二句目に「我」とあるのは恐らく光源氏を指すものと考えられる。そこで、これ迄とは少し趣をかえ彼を一詩全体の主語として、その視点から訳すことを試みてみたい。

前の播磨守は出家してこの明石の地に留住された。その家の奥深い部屋には大切に育てていた娘があり、私（光源氏）はひそかに心引かれたのでした。

（私も入道殿も）琴箏など手に数曲奏でましたところ、その音色は寄せる波の音にも調和しておりました。（その一方で）雲と海の水面に接する遥か彼方より、船で浦伝いにこの地に移って来たことを思うのでした。

明石に旅暮らしをしていても、都の月が心にかかってならず、物静かな住居に在って、民人の藻塩焼く煙などをわずかに眺めて暮らしておりました。

左遷された身の落ちぶれはてた境遇をまあ無念とは思ってはおりましたが、ともあれ、（都からの赦免の宣旨が下り）さながら枯れ木が春にめぐり逢って（花を咲かせるように）心も晴ればれとして心地よく思われることです。

「前吏」は前職。ここでは「前刺史」で元播磨守であった明石の入道を指す。彼については既に若紫の巻で「かの国の前の守、新発意のむすめかしづきたる家いといたしかし。大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて、まじらひもせず、近衛中将を棄てて申し賜れりける司なれど、かの国の人にもすこし悔られて、『何の面目にてか、また都にもかへらん』と言ひて頭髪もおろしはべりにける」（②202頁12行～203頁2行）という人である。首聯はほぼこの文を意識して詠まれていよう。猶、その明石の入道の暮らしぶりや人となりについても先の記述の後に述べられているが、それを語った良清は当時の播磨守であった人の息子で、元播磨守のかしづく娘に執心していたものの、「入道はかの国の得意にて、年ごろあひ語らひはべりつれど、私にいささかあひ恨むることはべり」（②230頁15行～231頁2行）と言うように、関係をうまくとり結べていなかったのであった。「染衣」は「其三奈掛レ冠棲遑息二影洞壑一、其三奈染レ衣精勤求二法山林一」（菅原文時「老閑行」『本朝文粋』巻一二・354）などとあり出家する意で、「おほけなく憂き世の民に覆ふかな我が立つ杣に墨染の袖」（『千載集』1132・慈円。

『百人一首』）のように黒く染め成した僧衣のことをいう和習語である。「深窓」は家の奥深い処。「本是富家鍾愛女、幽深窓裏養成レ身」（紀長谷雄「貧女吟」『本朝文粋』巻一・18）「養在二深窓一、外人不レ識」（大江朝綱「為二左大臣息女女御一修二四十九日一願文」同上巻一四・420）などと見え、これらの表現はすべて「楊家有レ女初長成、養在二深閨一人未レ識」（「長恨歌」『白氏文集』巻一二）をふまえたものであることは言うまでもあるまい。

頷聯の「琴箏」は共に「こと」の楽器だが、通常七絃を琴、十二絃を箏という。「三墳為二金玉一、五典為二琴箏一」（『抱朴子』外篇巻三六・安貧）は俗外に在って三墳五典（書物）を学び、文章を綴り、道徳的な教えを永遠に残す存在たらんとする楽天先生（白居易の字にも重なる）の言葉の中に見える例で、本朝でも「薦レ賢之楽調妙、以二故典一為二琴箏一」（大江匡衡「賦二因レ流泛一レ酒詩序」『本朝文粋』巻八・219）と見える。「命レ酒使三快弾二数曲一」（「琵琶引序」『白氏文集』巻一二）「清醑三盃斟二緑桂一、雅琴数曲撫二幽蘭一」（藤原明衡「歳暮即事」『本朝無題詩』巻五・340）は「数曲」の例。「軫」はここでは琴軫のこと。琴の絃の端に在って、緊めたり緩めたりして張り方を決める部分（絃を支える琴柱（ことぢ）とする解もある）である。「水蒲漸展二書帯葉一、山榴半含二琴軫房一」（「江亭翫レ春」『白氏文集』巻一九）「玉軫朱絃瑟々徽、呉娃徴調奏二湘妃一」（「聴レ弾二湘妃怨一」同上）など白詩によく見える語であり、「月沈二蘋藻一銀鉤影、風触二松杉一玉軫声」（「池榭消暑」『田氏家集』巻下・152）は本朝の例。「雲水」はここでは雲や海。『千載佳句』（巻上・秋興164）や『和漢朗詠集』（巻上・秋興223）にも採られた「楚思（紗）淼茫雲水冷、商声清脆管絃秋」（「盧侍御与二崔評事一為レ予於二黄鶴楼一致レ宴宴罷同望」『白氏文集』巻一五）の句はよく知られていようし、本朝にも「悠々雲水裏、郷思転傷レ情」（仲雄王「早舟発」『凌雲集』）などと見える。「千程」ははるかな旅程のこと。「程」は「十万里程多少難、沙中弾舌授二降龍一」（李洞「送三三蔵帰二西天国一」）「忽憶故人天際去、計レ程今日到二梁州一」（「同二李十一一醉憶二元九一」『白氏文集』巻一四）「酈水千程誰趁レ気、仙家十歩好尋レ香」（大江維時「叢香近二菊籬一」『類聚句題抄』）などとあるように距離を表現する。この聯の第三句は、初夏ののどかな夕月夜に明石の海上の景色を前に、光源氏が入道と語らううちに都の邸第の池の面を思い出す次の場面を背景にしていよう。

久しう手ふれたまはぬ琴を袋より取り出でたまひて、はかなく掻き鳴らしたまへる御さまを、見たてまつる人もやすからずあはれに悲しう思ひあへり。広陵といふ手をあるかぎり弾き澄ましたまへるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音にあひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり。

（②240頁1～6行）

更に、

掻き鳴らしたまへる声も心すごく聞こゆ。ふる人は涙もとどめあへず、岡辺に琵琶・箏の琴取りにやりて、入道琵琶の法師になりて、いとをかしうめづらしき手一つ二つ弾き出でたり。箏の御琴参りたれば、すこし弾きたまふもさまざまいみじうのみ思ひきこえたり。　（②241頁1～5行）

と入道との音楽の交歓を描くあたりも意識しているかも知れない。もっとも、この巻では琴がキイ・ワードとなって、「世になきものと聞き伝へし御琴の音」（②254頁2～3行）を弾ずる光源氏が、「このごろの波の音にかの物の音を聞かばや。さらずはかひなくこそ」（②254頁13～14行）と明石の君の琴の音を聴くことを期待し、彼女の住む岡辺の宿を訪れて、結局は契りを交わすことになる条や、光源氏が赦免の宣旨を得て上洛する前、別れを惜しみつつ明石の君の琴を聴くところが、重要な場面となっていることを改めて読者は思い返さずにはいられないであろう。第四句は、光源氏が入道に迎えられて明石の浦の浜辺の館に移り、その風情あるたたずまいに「げに都のやむごとなき所どころに異ならず、艶にまばゆきさままさりざまにぞ見ゆる」（②235頁5～6行）と感心する一方で、都の紫の上への思い黙し難く、彼が手紙を認め「はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして」（②236頁6～7行）の歌を書きつけるあたりを意識しているものと思われる。

頸聯の「旅泊」は「蕭条歳除夜、旅泊在二洛州一」（「除夜宿二洛州一」『白氏文集』巻一三）「芦廬篋筌泛然去、旅泊何方不レ識レ湄」（藤原周光「著二阿恵島一述志」『本朝無題詩』巻七・491）などとあり、旅の宿のこと。「華洛」は「顧二帰程之眇々一、隔二華洛於一片之春霞一」（源経信「春日住吉行旅述懐」『続本朝文粋』巻一〇）「華洛は平安城なり」（『平治物語』待賢門事）などとあって都のこと。この語存外中国古典詩に見えないようだ。「閑亭」は物静かな住居。「無能白首侍二池台一、不レ厭閑亭俯二巌隈一」（安倍文継「夜亭晩秋」『経国集』巻一三）などとある。「藻塩煙」と言えば塩を採取する時、塩水を

海藻に含ませ焼く時に出る煙のことで、「須磨の海人の塩焼衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず」（『万葉集』413・大網人主）「淡路島松帆の浦に朝凪に玉藻刈りつつ夕凪に藻塩焼きつつ」（同上935・笠金村）「須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」（『古今集』708・読人不知）あたりの歌も先ず想起されようか。以後、藻塩・藻塩の煙の類の歌語はよく用いられることになるようだ。また、関連して左大臣源融の河原院（『伊勢物語』八一段）の物語から紀貫之の「君まさで煙絶えにし塩釜のうらさびしくも見えわたるかな」（『古今集』852）を思い浮かべる人もあるだろうか。塩釜にしろ、淡路島・須磨にしろ、藻塩焼く地は都とは隔絶した鄙の地であることに変わりない。この聯の第五句は、明石の入道と語り合う光源氏の歌「旅衣うらがなしさにあかしかね草の枕は夢も結ばず」（②247頁8～9行）あたりの場面を背景とするか。時に「いたく更けゆくままに、浜風涼しうして、月も入り方なるままに澄みまさ」（②244頁6～7行）る夜、「いかにして都の貴き人に奉らん」（②245頁10～11行）と思う入道は光源氏に娘を託すべくかき口説くのであった。ついで光源氏が入道の娘に手紙を遣わしつつ、一方で「京のことおぼえてをかし」（②250頁8行）と都での女性達との文（ふみ）のやりとりを想い起こす場面となり、更に「京のことを、かく関隔たりてはいよいよおぼつかなく思ひきこえたまひて、いかにせまし、戯れにくくもあるかな、忍びてや迎へたてまつりてまし」（②251頁4～6行）などと都の紫の上を呼び寄せようかと、気弱な心境の揺ぎを見せて、入道の娘明石の君を訪うシーンにつながる。訪れたのは「八月十二三日の月はなやかにさし出でたる」（②255頁4行）頃で、岡辺の宿に向かう途次、入江の月に光源氏は「秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲居をかけれ時のまも見ん」（②255頁12～13行）と詠う。雲を駆ける月毛の駒が遠い都の紫の上のもとへ自分を運んでくれないものか、という気持ちであろう。月は遠く隔てられた明石と都をつなぐものだが、このあたりの場面では、月が都（故郷）への思いを募らせる触媒（なかだち）となっている。第六句は、年が改まって（流離三年目）、光源氏に「重ねて京へ帰りたまふべき宣旨」（②262頁9行）が下り、都での彼の復活がイメージされる一方で、逢引を重ねた明石の君の懐妊が語られ、無分別な恋に身を委ねる性分の己を顧みて、上洛が迫る二日前、「見棄てがたく口惜しう思さる。さるべきさまして迎へむと思しなりぬ」（②264頁7～8行）と都に彼女を迎えとる決意をし、彼

女を慰めつつ別れを惜しむという場面展開が背景にある。直接的には光源氏が「このたびは立ちわかるとも藻塩やく煙は同じかたになびかむ」と詠み、「かきつめて海人のたく藻の思ひにもいまはかひなきうらみだにせじ」（②265頁2～6行）と明石の君が応じる条を詠んでいるとみても良いだろう。

尾聯の「任他」は中国古典詩では「たとひ～でも」の意で解すべき（塩見邦彦『唐代口語の研究』28～29頁、中国書房・平成七年）というが、本朝では「さもあらばあれ」と訓じられ、不本意ではあるがやむをえない、致しかたないという意に解するのが一般か。「寵辱憂歓不レ到レ情、任他朝市自営々」（「城東閑遊」『白氏文集』巻一三）「淼々任他踰二北海一、皤々定是養二東膠一」（「和二大使交字之作一」『菅家文草』巻五）などと見える。「遷客」は左遷された人。「夢レ郷遷客展転臥、抱レ児寡婦彷徨立」（「山鶴鵠」『白氏文集』巻一二）など白詩によく見え、「我為二遷客一汝来賓、共是蕭々旅漂身」（「聞レ雁」『菅家後集』）と用いられている。「漂淪」は「自叙、少小時歓楽事、今漂淪憔悴、転二徙於江湖間一」（「琵琶引序」『白氏文集』巻一二）とあり、落ちぶれる様。「枯木」は枯れ木のことで、ここでは左遷の境遇にあった光源氏を指し、その彼が再び帝の思召しにより脚光を浴びることになるのを「逢春」と表現している。「枯木発レ栄」（曹植「七啓」『文選』巻三四）「起二煙於寒灰之上一、生二華於已枯之木一」（『三国志』巻二一・魏書二一・劉廙伝）、「宿昔猶枯木、迎レ晨一半紅」（「惜二桜花一」『田氏家集』巻上）などという表現参照。「男児若喪レ婦、能不二暫傷一レ情、応レ似二門前柳一、逢春易レ発レ栄」（「婦人苦」『白氏文集』巻一二）「雲霞未レ辞レ旧、梅柳忽逢レ春」（菅原清公「冬日汴州上源駅逢レ雪」『凌雲集』）などは「逢春」の例。「快然」は心地良い様で、「快然自足、曽不レ知二老之将一レ至」（王羲之「蘭亭序」『晋書』巻八〇・列伝第五〇・王羲之）の名句はよく知られる。尾聯は須磨・明石と流竄生活を送った源氏が帰洛して二条院に戻り、程なく「もとの御位（参議右大将）あらたまりて、数より外の権大納言になり給ふ。次々の人も、さるべきかぎりは、もとの官（つかさ）還し賜はり世にゆるさるるほど、枯れたりし木の春にあへる心地して、いとめでたげなり」（②273頁5～8行）とある本文をふまえたものであろう。

十四　澪標

皇矣龍楼催冠礼　皇（おお）いなるかな　龍楼冠礼を催す

天齢十一已治邦　天齢十一にして　已に邦を治む
大臣身老病雖冒　大臣の身老いて　病に冒さるると雖も
少主翼扶詔尚降　少主の翼扶とて　詔は尚し降りぬ
衣似紅花将錦葉　衣は紅花に似　将錦葉ならん
舟従明石到清江　舟は明石より　清江に到りぬ
澪標朗詠寄懐処　澪標の朗詠　懐ひを寄する処
田蓑嶋辺鶴一双　田蓑の嶋の辺に　鶴は一双

〈七律。邦・降・江・双（上平声江韻）〉

巻名は第七句に詠込まれている。聯毎に解釈すると以下のようになるであろうか。

皇太子様におかれましては、まばゆいまでにご立派に御元服の儀を行われ（ついで御譲位の沙汰もございまして）十一歳にして已に治国の君（天皇）におなりになったのでございます。

致仕の左大臣様（葵の上の父）は老いられ病の身ではございましたが、幼い帝の摂政として政をおとりになるべく詔が下され（太政大臣におなりになっ）たのでございました。

（その年の秋の光源氏様は住吉に御参詣なさいますが、その折の御一行の）袍衣なども美しく御立派で、紅色の花の如きか、はたまた紅葉の錦かと思われたことでございまして、明石の君御一行様も舟で住吉においでした（から、光源氏様一行の華やかなにぎわいぶりにただただ目を奪われたのでございました）。

（明石の君が同じく住吉に来合わせていたことを知った）光源氏様は彼女に思いを寄せられ「澪標恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな」と歌を送られる。すると、明石の君も田蓑の島での禊に用いられる木綿に付けて「数ならで」の歌をお返しになるが、（夕暮れ時の田蓑島の）番いの鶴の哀れな鳴き声を耳にされる（と共に彼女に逢いたく思いつつも涙に濡れる「露けさの」の歌をお詠みになった）のでございました。

首聯は二月の春宮の元服の儀式から、急な御譲位に依り、元の左大臣（葵の上の父）が老病の身をおして幼い帝の摂政として太政大臣になるという次の場面を背景としている。

あくる年の二月に、春宮の御元服のことあり。十一になりたまへど、ほどより大きにおとなしうきよらにて、ただ源氏の大納言の御顔を二つにうつしたらむやうに見えたまふ。

いとまばゆきまで光りあひたまへるを、世人めでたきものに聞こゆれど……（中略）……同じ月の二十余日、御国譲りのことにはかなれば、大后思しあわてたり。

（281頁13行～282頁8行）

「皇矣」とは偉大な様子。『毛詩』（大雅「皇矣」）に「皇矣上帝、臨レ下有レ赫、監二視四方一、求二民之莫一」とある毛伝に「皇、大」とある。これは周の文王を讃美した表現とも言われ、かがやかしく立派な様を表わすとされる。「皇矣、漢祖纂二堯之緒一」（班固「史述賛三首」其一「述二高紀一第一」『文選』巻五〇）などとも見え、本朝でも「如レ此則挑兮之徒、帰二我国冑一、皇矣之士、列二彼周行一」（三善清行「意見十二箇条」其四「請レ加二給大学生徒食料一」『本朝文粋』巻二・67）などと用いられている。「龍楼」は皇太子（の門名）を指す。「出二龍楼一而問レ豎、入二虎闈一而歯レ冑」（王融「三月三日曲水詩序」『文選』巻四六）とある李周翰注に「龍楼、漢太子門名也」とあり、『初学記』（巻一〇・皇太子）にも「龍楼〈漢書曰、孝成皇帝、元帝太子也。寛博謹慎、初居二桂宮一、上嘗急召、太子出二龍楼門一、不三敢絶二馳道一、西直至二城門一、得レ絶乃度〉」と見えて、「今来脱二豸冠一、時往侍二龍楼一」（「贈二呉丹一」『白氏文集』巻五）「龍楼永楽、猿巌弥堅」（大江以言「浄妙寺塔供養呪願文」『本朝文粋』巻一三・394）などと用いられている。「冠礼」は加冠（元服）の儀礼で、ここは東宮が元服したことを言う。『礼記』（冠義第四三）に「冠者礼之始也。是故古者聖王重レ冠。古者冠礼筮レ日筮レ賓。所三以敬二冠事一。敬二冠事一、所二以重一レ礼。重レ礼、所三以為二国本一」とある。今日一般に成人の儀式と言えば「二十曰レ弱、冠」（『礼記』曲礼上第一）の表現が知られるが、東宮は十一歳で成人され即位して冷泉帝となられたのである。「治邦」は治国に同じく国政を執り治めること。「治レ邦者行二此節一、則郷之有レ徳者益衆」（『韓非子』解老）は一例。

頷聯は前聯を受け、朱雀帝が冷泉帝に譲位なさったものの、まだ十一歳と幼なかった為に、光源氏にその輔佐が期待されたのだが、彼は辞退し、致仕の左大臣が老病の身で太政大臣として摂政の役目を仰せつかることになったという次の条が背景になっている。

世の中改まりて、ひきかへいまめかしきことども多かり。源氏の大納言、内大臣になりたまひぬ。（中略）やがて世の政をしたまふべきなれど、「さやうの事しげき職にはた

へずなむ」とて、致仕の大臣、摂政したまふべきよし譲りきこえたまふ。「病によりて位を返したてまつりてしを、いよいよ老の積もり添ひて、さかしきことはべらじ」とうけひき申したまはず。（中略）病に沈みて返し申したまひける位を、世の中かはりてまた改めたまはむに、さらに咎あるまじう公私定めらる。さる例もありければ、すまひはてたまはで、太政大臣になりたまふ。御年も六十三にぞなりたまふ。　（②282頁10行～283頁9行）

「事々無レ成身也老、酔郷不レ去欲二何帰一」（「酔吟二首」其一『白氏文集』巻一七）他「身老」は白詩に散見する語。老いて病むことも「老与レ病相仍」、華簪髪不レ勝」（「衰病」同上巻二〇）等を引くまでもなく白詩に頻見する表現。「少主」は幼君、幼い天皇を指し、「輔二少主一守レ城深堅」（『史記』巻一二〇・汲黯伝）「少主未レ親二万機一之間、臣基経摂二行政事一、如二忠仁公故事一」（菅原道真「為二昭宣公一辞二摂政一上二太上皇一第一表」『本朝文粋』巻四・98）などと用いられている。「翼扶」は助けること。「降自二秦漢一、此資二戦力一、至下於翼二扶王室一、皆武人屈起上」（范曄「後漢書二十八将伝論」『文選』巻五〇）と見えるが、この語には次のような故事が喚起されよう。漢の高祖が太子を廃し、戚夫人の子の趙王如意を立てようとした時、呂后がこれを防ぐ為に張良に諮ると、商山の四皓の助力を得ることを勧められる。太子が四翁に守り輔けられていることを知った高祖は、戚夫人に「彼四人輔レ之、羽翼已成、難レ可レ動矣」（『史記』巻五五・留侯世家）と述べ、如意を立てることを諦めさせたというものである。この語は本朝でも「得二扶翼於戚里一、誰招二商山四皓之霜一」（大江匡衡「冬日陪二東宮一聴二第一皇孫初読二御注孝経一詩序」『本朝文粋』巻九・258）などと用いられていた。

頸・尾聯は、住吉参詣の条（くだり）を詠むので、詩句の内容は澪標巻の後半へと一気に飛ぶことになる。従って明石の君に女子が誕生したこと、光源氏がその乳母選びをし明石に遣わしたこと、そして紫の上に明石の君のことを告白して悲しませたことや、五十日の祝いの使者を立て明石の入道一家を喜ばせたりしていること、また花散里を訪れたり、代替わりによる宮中の人々の動向等を語る部分などには全く触れていないことになる。

その秋住吉に詣でたまふ。（中略）をりしもかの明石の人、年ごとの例のことにて詣づるを去年はさはることありて怠りけるかしこまりとり重ねて思ひ立ちけり。舟にて詣でた

り。岸にさし着くるほど見れば、ののしりて詣でたまふ人けはひ渚に満ちて、いつくしき神宝を持てつづけたり。楽人十列など装束をととのへ容貌を選びたり。

（②302頁3～12行）

光源氏の住吉参詣と明石の一族の久しぶりの参詣がたまたま重なる。明石の一行が舟で住吉に着くという条は第六句と関わるものである。「清江」は「すみのえ」（住の江）と訓むべき語である。そして、彼らはきらびやかな品を携えにぎわいを見せる源氏の一行と出会うことになる。装束を整えつき従う者達の様子に驚きつつ、

松原の深緑なるに、花紅葉をこき散らしたると見ゆる袍衣の濃き薄き数知らず。六位の中にも蔵人は青色しるく見えて、かの賀茂の瑞垣恨みし右近将監も靫負になりて、ことごとしげなる随身具したる蔵人なり。良清も同じ佐にて、人よりことにもの思ひなき気色にて、おどろおどろきしき赤衣姿いときよげなり。

（②303頁7～15行）

と須磨・明石に登場していた馴染の人物に注目する直前の記述が第五句に反映していると考えられる。「紅花」は赤い美しい花。「偏使二紅花散一、飄颻落二眼前一」（梁簡文帝「戯作二謝恵連体一十三韻」『玉台新詠』巻七）「不レ及紅花樹、長栽二温室前一」（「廬山桂」『白氏文集』巻一）などとあり、「青春雨後雲天晴、夾レ岸紅花射レ水明」（藤原三成「漁歌」『経国集』巻一四）と見える。「錦葉」は紅葉のこと。「合歓在レ躬、何失二錦葉之独貴一」（源英明「孫弘布被賦」『本朝文粋』巻一・12）「昨陪天闕黄花露、今入雲林錦葉秋」（藤原明衡「秋日遊二雲林院一」『本朝無題詩』巻一〇・689）、或は早くに「天祇風筆画二雲鶴一、山機霜杼織二葉錦一」（大津皇子「述志」『懐風藻』）などとも見え、「このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに」（『古今集』420・菅原道真）と詠われていることも想い合わされよう。

尾聯は、明石の君一行が「今日は難波に舟さしとめて、祓をだにせむ、とて漕ぎ渡りぬ」（②305頁3～4行）と、光源氏一行の華やかさに気圧され難波に移った後のこと、惟光がそれを光源氏に告げたことで、彼の心に「いささかなる消息をだにして心慰めばや、なかなかに思ふらむかし」（②306頁6～7行）という思いが起こることに関わる。

御社立ちたまひて、所どころに逍遥を尽くしたまふ。難波の御祓などことによそほしうに仕まつる。堀江のわたりを

御覧じて、「いまはた同じ難波なる」と、御心にもあらで、うち誦じたまへるを……。　（②306頁7～10行）

が恐らく「澪標朗詠」の語の背景であろう。「侘びぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ」（『拾遺集』766・元良親王）の歌を口ずさむことで、光源氏自らも「みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな」と言葉を紡ぐこととなり、更に明石の君の「数ならで難波のこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ」の返歌につながり巻名とされることになるわけだが、末句は更に次の場面を意識した句である。

田蓑の島に禊仕うまつる御祓のものにつけて奉る。日暮れ方になりゆく。夕潮満ち来て、入江の鶴も声惜しまぬほどのあはれなるをりからなればにや、人目もつつまずあひ見まほしくさへ思さる。　（②307頁6～9行）

「朗詠」は口ずさみうたう意で、「臨レ風朗詠従二人聴一、看レ雪閑行任二馬遅一」（「醉吟」『白氏文集』巻五八）「朗詠叢辺立、悠々忘二日斜一」（「牡丹」『菅家文草』巻五）などはその語例。「寄懐」は慕う、心中の思いを届ける意。「微之重誇二州居一、其落句有二西州羅刹之謔一。因嘲二茲石一聊以寄レ懐」（『白氏文集』巻五三）は後者の、「霊島聞レ名遥寄レ懐、秋風尋到立徘徊」（高階積善「竹生島詩」『本朝麗藻』巻下）は前者の意が込もる例。「鶴一双」は鶴のひと番（つが）いを言う。「秋鶴一双船一隻、夜深相伴月明中」（「舟中夜坐」『白氏文集』巻五八『千載佳句』巻下・泛舟588）などとある。双鶴というに同じである。